甲斐市文化財調査報告　第29集
（　山　梨　県　）

御　岳　田　遺　跡　9

都市計画道路田富町敷島線道路改良工事に伴う
平安時代等の発掘調査報告書

2019

山梨県中北建設事務所
甲 斐 市 教 育 委 員 会

巻頭写真１　調査区遠景（南西から）

巻頭写真２　調査区遠景（西から）

巻頭写真３　調査区　北区　完掘（南から）

巻頭写真４　調査区　南区　完掘（南から）

序　　文

甲斐市は、平成27年に行われた国勢調査の結果、山梨県で唯一人口が増加しているまちです。増加の要因として考えられることは、県都甲府に隣接し、交通の利便性の良いことがあげられるでしょう。そのため、開発によって生じる埋蔵文化財包蔵地の問い合わせも増加の一途をたどっております。

現在、市内には220箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていますが、とくに市中央部の茅ヶ岳南麓や市東部の荒川扇状地に集中しています。この中には、居住域と墓域がセットで発見された弥生時代の「金の尾遺跡」や、山梨県最古の登窯跡である「天狗沢瓦窯跡」など、重要な遺跡が点在しています。これらのことから、山梨県の歴史を学習する上でも注目される地域となっています。

今回報告します「御岳田遺跡」の第９次発掘調査は、甲斐市大下条地内の県道拡幅工事に伴い行われました。平成28年度に発掘調査を行った場所の隣接地にあたります。調査面積は狭小ですが、墨書土器が出土するなど、新たな調査成果を得ることができました。

先にも述べましたとおり、近年甲斐市では頻繁に開発が行われるようになり、埋蔵文化財の保護が急務となってきております。今後は調査で得られました成果を後世に伝えていくとともに、学校教育や歴史研究、生涯学習の資として多くの方々に幅広く活用していただければ幸いです。

最後に、工事主体者である山梨県中北建設事務所の文化財保護に対する深いご理解のもと、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に感謝申し上げ序といたします。

平成31年２月

甲斐市教育委員会
教育長　生山　　勝

例　　言

1．本書は、山梨県甲斐市大下条に所在する御岳田遺跡第９次発掘調査報告書である。
2．本書は、都市計画道路田富敷島線大下条第２期工区道路改良工事に伴い実施された。調査面積は道路拡幅予定地約30㎡である。調査費用負担は山梨県中北建設事務所による。
3．発掘調査及び整理分析調査期間
　試掘調査　　平成30年５月７日～同年５月11日
　発掘調査　　平成30年７月20日～平成30年９月７日
　整理分析調査　平成30年９月８日～平成31年２月28日
4．調査組織は次のとおりである。
　調査主体者　　甲斐市教育委員会
　調査担当者　　長谷川 哲也（甲斐市教育委員会）
　調査事務局　　甲斐市教育委員会 教育部 生涯学習文化課 文化財係
　発掘・整理分析調査協力員（敬称略・五十音順）
　　青柳 正史　秋山 髙之助　伊井　実　飯沼 源治　笠井　治　小林　求　斉藤 功記　醍醐 三郎
　　高添 美智子　瀧口 晴彦　立花 重光　田中 ひとみ　堤　吉彦　手塚 松雄　羽中田 勲　日向 充雄
　　深澤 友子　古屋 秀雄　望月 厚子　望月 典子　望月 美香　森沢 篤美　箭本 千尋　横内　博
5．本書は長谷川が執筆した。
6．報告書作成にあたり、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略）
　坂本 美夫　新津　健　中込 司郎　鈴木 麻里子　畑　大介（以上、甲斐市文化財保護審議委員）
7．本書の編集及び遺構、遺物の写真撮影は長谷川が行った。
8．遺構測量と平面図作成、出土遺物の出土位置記録は疾測量株式会社（代表取締役：石井猛雄）に委託した。
9．重機による表土剥ぎ及び埋戻しは、三枝興業（代表：三枝哲雄）が行った。
10．御岳田遺跡第９次発掘調査において得られたすべての資料は一括して甲斐市教育委員会に保管してある。

凡　　例

1．座標は世界測地系に準拠した。また、標高は東京湾平均海水面水準である。
2．遺構堆積土及び土器の色調は、農林水産省農林技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』に準拠している。
3．本書の遺物実測図に用いたスクリーントーンは、次のとおりである。
　赤彩　　緑釉陶器断面
4．各挿図の縮尺は、遺構1/40、土器1/3、石器･石製品1/2を原則とし、それぞれにスケールを付した。
5．出土遺物観察表の計測値欄中、（　）内数値は推定を表し、残部の計測は数字の頭に「残」と記した。
6．遺構平面図中の数字と黒点は、遺物挿図番号と出土位置を表す。
7．遺物番号は本文、挿図、観察表で統一し、１～17の通し番号を付してある。
8．本書で使用した地図は、甲斐市都市計画地図および国土地理院刊行の２万５千分１地形図「甲府北部」をトレースして使用した。

本　文　目　次

序文／巻頭写真／例言・凡例／目次
第１章　調査の経過と概要 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　遺構と遺物
　第１節　基本層序 …… 13
　第２節　遺構と遺物 …… 14
第４章　まとめ …… 17

図　版　目　次

第１図　甲斐市の位置 …… 3
第２図　周辺地形図 …… 7
第３図　御岳田遺跡と周辺の遺跡 …… 8
第４図　調査区位置図① …… 9
第５図　調査区位置図② ……11
第６図　調査区全体図 ……12
第７図　基本土層図・土層説明 ……13
第８図　１号住居跡　遺構と遺物 ……19
第９図　２号住居跡　遺構と遺物 ……20
第10図　１号土坑・１号落込み ……21
第11図　ピット・石組み ……22
第12図　遺構外　出土遺物① ……23
第13図　遺構外　出土遺物② ……24

表　目　次

第１表　出土遺物観察表 ……25

写　真　目　次

写真１　試掘状況 …… 1
写真２　表土剥ぎ　掘削風景（南区） …… 1
写真３　測量委託　実施状況（ＢＭ設定）…… 2
写真４　測量委託　実施状況（遺構測量）…… 2
写真５　遺物実測作業 …… 2
写真６　挿図編集作業 …… 2
写真７　調査区周辺の様子 …… 5

写真図版目次

図版１　南区　２号住居跡・１号住居跡　完掘（南から）
南区　１号住居跡　完掘（南西から）
南区　１号住居跡　土器（１・２）出土状況（北西から）
南区　１号住居跡　土器（１・２）出土状況
南区　１号住居跡　土器（４）出土状況

図版２　南区　１号土坑　完掘（北西から）
北区　１号落込み　完掘
南区　Pit－１　完掘
南区　Pit－２　完掘
北区　Pit－３　完掘
北区　Pit－４　完掘
北区　Pit－５　完掘
南区　石組み　完掘

図版３　北区　完掘（北から）
南区東壁　土層堆積状況
北区東壁　土層堆積状況
南区　調査風景
北区　調査風景

図版４　出土遺物

第１章　調査の経過と概要

１．調査に至る経緯

山梨県道25号は、甲斐市中下条から中央市布施を結ぶ県道である。市町村合併によって敷島町が甲斐市、田富町が中央市となったことで、現在の路線名は「甲斐中央線」と呼ばれている。県道25号（以下、本路線）は、甲斐市内では竜王駅北側の島上条・中下条・大下条の各地区と、竜王駅南側の篠原や西八幡などの各地区を結び、多くの市民・県民の生活に必要不可欠な路線である。本路線はいくつかの主要幹線道路と交わっており、竜王駅以北では甲府市道愛宕町下条線および甲府韮崎線（県道６号、通称：山の手通り、穂坂路）と交差し、甲府市や韮崎市方面とつながる。また、竜王駅以南では国道52号（美術館通り）や国道20号（甲州街道）をはじめ、県道５号（甲府南アルプス線）、県道３号（甲府市川三郷線）とも交差し、甲府市や南アルプス市など各地へつながる。以上のことから判るとおり、本路線は甲府盆地の南部と北部を結び、かつその他の幹線道路と多く交わることから、市民・県民にとって利用頻度の多い重要な路線である。利用頻度の多い路線は必然的に交通量も増加し、交通渋滞が発生することが多い。甲斐市内の本路線においても、竜王駅北側と南側では、朝夕の通勤通学時間帯を中心に交通渋滞が恒常的に発生している。このことから、竜王駅周辺では本路線の拡幅工事が数年来行われており、本報告も路線拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査の報告である。

本路線は周知の埋蔵文化財包蔵地「御岳田遺跡」に含まれている。また、恒久的建造物（道路）を建設するため、拡幅工事に先立って遺跡の試掘・確認調査の必要があった。調査の結果、遺構・遺物を確認したため、申請者である山梨県中北建設事務所長に対して本調査が必要であることを回答した。

写真１　試掘状況

写真２　表土剥ぎ　掘削風景（南区）

２．調査の方法と経過

本調査は平成30年７月20日から始まった。調査対象区域は県道西側の個人住宅前である。個人住宅への出入り口と廃土置き場の確保、また安全管理上一度に調査をすることは困難を極めることから、調査区を南北に分割して調査をすることとした。

各調査区とも表土剥ぎは重機を用いたが、包含層からは手作業での掘削を行った。遺構のセクション図・エレベーション図・出土遺物の平面図は手実測および写真実測で行い、縮尺は１/20を基本とした。遺構測量と遺物の取り上げは疾測量株式会社に委託した。また、発掘調査の始まった平成30年７月は連日のように気温35度を記録する猛暑日が続き、調査開始直後である７月23日には甲府市で最高気温40.3度が

記録された（出典：気象庁ＨＰ　過去の気象データ検索）。そのような酷暑の中、発掘調査作業員の健康状態にも留意しながら調査を行い、雨天による調査中止等もあったが、発掘調査は平成30年９月７日まで行った。

写真３　測量委託　実施状況（ＢＭ設定）

写真４　測量委託　実施状況（遺構測量）

３．整理・分析作業の経過

平成30年９月８日から報告書刊行に向けて整理・分析作業を開始し、これらの作業は主に文化財整理室で行った。実測図のトレースは『Adobe Photoshop CC』、『Adobe Illustrator CC』にてデジタルトレースし、挿図編集・版組も同ソフトを用いて行った。それと並行し、発掘調査現場での情報をもとに遺構の図面や出土遺物の検討を行い、齟齬がないよう留意し本報告を記述した。これら一連の作業を終え、平成31年２月28日に報告書の刊行となった。

写真５　遺物実測作業

写真６　挿図編集作業

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

１．甲斐市の地理

本市は甲府盆地の北西側に位置し、東側は甲府市と昭和町、西側は韮崎市と南アルプス市に接している。平成16年９月１日に双葉町・敷島町・竜王町の３町が合併して甲斐市となり、現在の市域を構築してい

る。面積は71.94㎢、人口は平成30年12月末現在およそ７万５千人である。

市域は標高千数百ｍの山岳地から、丘陵、扇状地などバラエティに富んだ地形である。市域はおおよそ４つのエリアに分類することができる。市の北部は茅ヶ岳（1704m）や曲岳（1642m）、太刀岡山（1259m）、黒富士（1633m）など、標高千数百ｍを超える山々が点在する「山岳エリア」。地質は主に凝灰岩や凝灰角礫岩で構成されており、南流する亀沢川によって急峻な段丘崖を構築している。また、荒川の上流である国特別名勝御岳昇仙峡付近は花崗岩で構成されている。市の中央部分は茅ヶ岳の火山活動によって形成された台地が広がる茅ヶ岳南麓の「丘陵エリア」で、赤坂の地名にもみられるとおり、褐色で粘性が非常に強い火山灰層が広がる。市の南部は南アルプス鋸岳を源流とする釜無川（富士川）によって形成された「扇状地エリア」で、北西から南東にかけてゆるやかに傾斜する扇状地である。市の東部は、甲府市との境を流れる奥秩父山系の金峰山を源とする荒川によって形成された「荒川扇状地エリア」で、かつて大部分は水田として利用されていた。扇状地の西縁は荒川と貢川によって形成された段丘崖で、この段丘上に天狗沢瓦窯跡（山梨県指定史跡）が立地している。

第１図　甲斐市の位置

２．遺跡の立地

御岳田遺跡は市域の東部に立地し、甲府市との境界を流れる荒川と、茅ヶ岳火山によって形成された通称「赤坂（登美）台地」との間に位置し、標高は約295ｍを測る。この台地と荒川の間には、南北に延びる２本の微高地があり、本遺跡は西側の微高地上に営まれていた集落遺跡であることが、これまでの調査で明らかになっている。また、御岳田遺跡の南には、山梨県下でも著名な縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である金の尾遺跡が隣接しており、字で遺跡を分けてはいるが、互いに関連しあう遺跡であると思われる。

さて、「御岳田」の名は慶長６年（1601）の検地帳に記載されている「村西」「なかさと西」を併せた地名で、御岳塚という小さな塚が田圃の中にあったことに由来するとされる（『中巨摩郡地名誌』）。平成５年（1993）に行われた第１次調査では、花崗岩質の礫を約70㎝の高さまで墳丘状に積み上げた塚を確認しており、前述の御岳塚との関連も考えられる。また、「御岳」とは金峰山金櫻神社（甲府市御岳町）のことをさし、本遺跡の東側にある大下条集落の中心を南北に御嶽道（みたけみち）が走っていることも「御岳田」の由来になっているのであろう。

その名が示すとおり、本遺跡周辺はかつて田圃して土地利用されており、田圃や水にかかわる小字がいくつかある。「餅田」「柳田」「中更（なかふき）（フケが転訛したものか）」「深田」「泉尻」などがそれに該当する。戦後にアメリカ軍が撮影した空中写真で本遺跡周辺を確認すると、大下条の集落以外は田圃として土地利用されていることが一目瞭然であり、田圃や水に関する小字名がつけられていた理由がよくわかる。また、先の空中写真からは、今次調査区が小河川に挟まれている場所であることが看取できる。調査区の西には、「どんどん川（どんど川）」と地元で呼称されている小河川が、その東には御嶽道に沿って上条堰（一ノ堰）がそれぞれ南流しており、水と関わりが深い地名が点在することもうなずける。また、このどんどん川は『甲斐国志』にも、「（大下条）村西に百々河（ドンドンガハ）という砂石の荒地あり、即ち荒河の古道、もとの郡界なり」

と記述がある。「砂石の荒地」「（荒）河の古道」という語は今次調査によくあてはまる語句であり、全ての調査区で河川の旧河道と思われる砂礫層を確認した。

これらの小河川は、周辺の宅地化が進む中で暗渠が施されるなど現状確認が難しくなっているものの、住宅地等に残るわずかな高低差等によって河川の痕跡を把握することができる。以上のことから、今次調査区は荒川扇状地が作り出した西側微高地上に立地するものの、かつては河川の流路であった場所に営まれた遺跡である。

第２節　歴史的環境

１．御岳田遺跡と周辺の遺跡

以下に主な遺跡を挙げながら、周辺の遺跡を概観することとする。荒川扇状地の西側微高地上に立地する**御岳田遺跡**の南には、県下でも著名な弥生時代後期の集落遺跡である**金の尾遺跡**がひろがる。先にも述べたが、金の尾遺跡も西側微高地に立地し、道路を挟んで本遺跡と隣接しているだけに、互いに関連しあう遺跡と思われる。この西側微高地は、金の尾遺跡で縄文時代中期の住居跡が確認されていることからもわかるとおり、縄文時代から人々が生活していたことが明らかになっている。この尾根を北に進むと、平成26年度の第１次調査で、平安時代の住居跡が確認された**金ノ宮遺跡**がある。この遺跡の東西にも小河川が南流しており、やはり微高地上に立地している。縄文土器片や黒曜石の剥片・チップが多量に出土したことから、付近には縄文時代の集落も存在していたと思われるが、後世の土地利用によって削平されており、その実態は不明である。金ノ宮遺跡から北上すると、山梨県最古のミニチュア土器が出土した**石原田遺跡**、主要地方道甲府韮崎線（通称：山の手通り、穂坂路）を北に渡ると古墳時代を中心とした**原腰遺跡**となり、西側微高地上の遺跡はここで途切れることとなる。

続いて、主要地方道敷島田富線（県道25号）のやや東側、埋没谷をはさんだ東側微高地は、西側微高地よりも濃密に遺跡が分布する。また、東側微高地上には、金峰山金桜神社（甲府市御岳町）への登拝路である「御嶽道（みたけみち）」が南北に貫入しており、道沿いには石造物が多いことも特徴の一つである。扇頂付近の東側微高地には、甲府盆地周辺部の古墳では北限に位置する**大塚古墳（大塚遺跡）**が位置し、そこから南へ下ると、平成27年度の本調査で石室の基底部が発見された**大庭遺跡（大庭古墳）**が位置する。石室内からは、計23個の水晶製切子玉や等、古墳時代後期の良好な資料が得られ、甲府盆地北西部の当該期を研究する上で重要な調査となった。さらに南下をすると、甲斐市立敷島中学校周辺に行き当たる。**山宮地遺跡**は中世の土壙墓が多数検出され、仏具を含む銅製品類17点が一か所からまとまって出土している。隣接する**村続遺跡**では、８世紀後半から12世紀代にかけての住居跡が37軒検出された。遺物は瓦や緑釉陶器、貿易陶磁器、銅製小仏像の台座が出土しており、周辺の同時代の集落遺跡とは出土遺物の様相が異なる特徴的な遺跡である。主要地方道甲府韮崎線をこえた先にある**不動ノ木遺跡**では、試掘調査での確認にとどまるが、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての焼失住居跡や、平安時代後期の土師器片などが出土している。不動ノ木遺跡をこえると**松ノ尾遺跡**に行き当たる。この遺跡は西側微高地の南部のほとんどを占める遺跡で、住居跡から出土した銅造仏形坐像（県指定有形文化財）がつとに著名である。また、平成27年度の調査では、周溝墓の溝から残存高84.3㎝の大型赤彩壺が出土した。また、平成30年度現在で17次にわたる調査が行われており、市内遺跡の中では最も本調査件数の多い遺跡である。

東西の微高地上以外には、７世紀後半の登窯跡が３基発見された**天狗沢瓦窯跡**が段丘上に立地する。瓦の供給先は発見されていないものの、付近に古代寺院や役所の遺構が存在する可能性が高いと推測されており、近年は研究その推定地をめぐり活発な議論がなされている。

以上をまとめると、市域を見渡しても荒川扇状地エリアには遺跡が集中しており、加えて調査件数も多いことから、資料も豊富である。加えて扇状地エリアは、市域の歴史解明だけにとどまらず、甲斐国の歴史を研究する上でも注目すべき地域といえる。

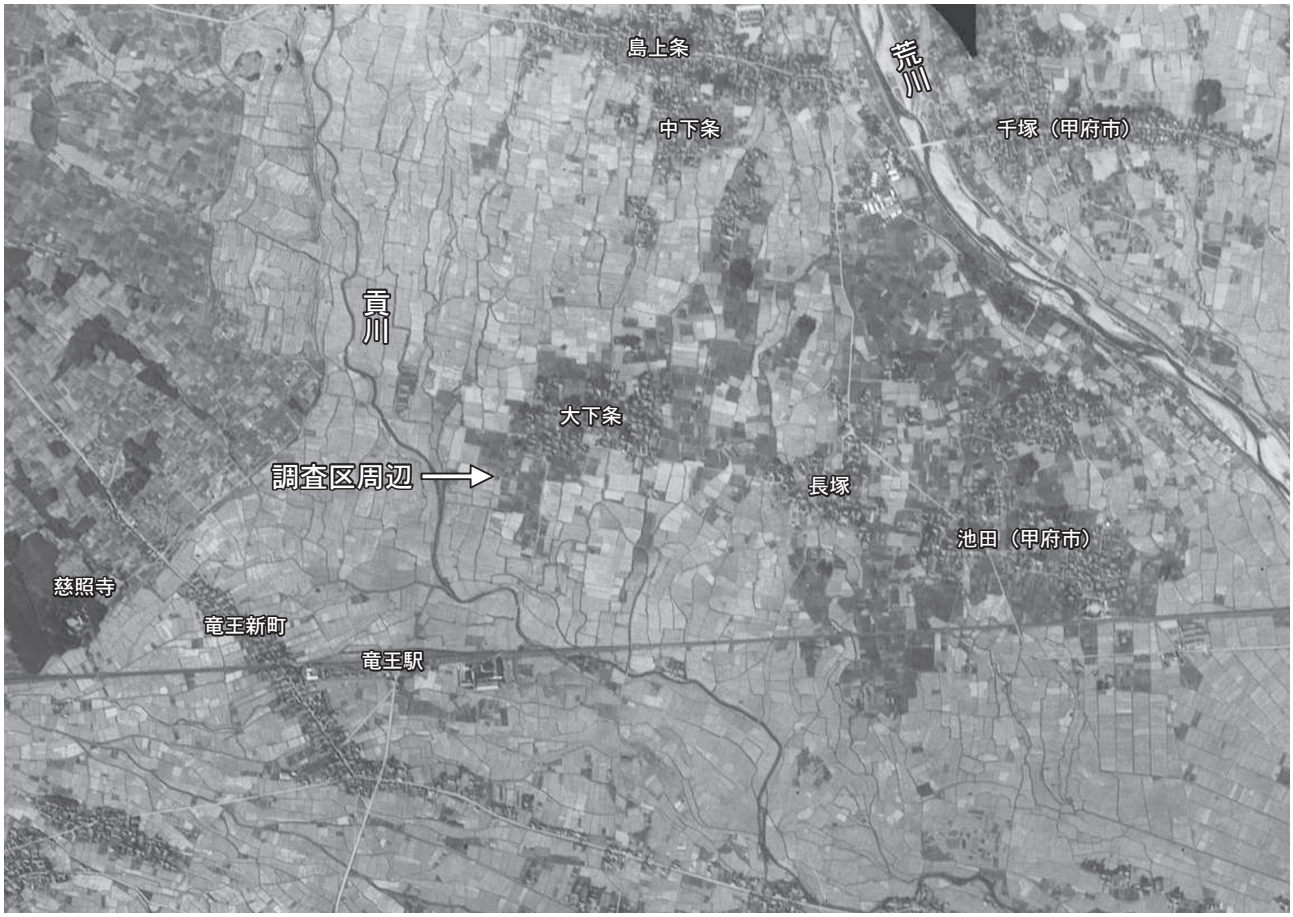


写真７　調査区周辺の様子

（国土地理院　地図・空中写真閲覧サービスから「甲府」（1948）を一部抜粋・加筆）

２．御岳田遺跡の概要

次に御岳田遺跡の概要について述べる。本遺跡は前節で記したとおり荒川扇状地の西側微高地に立地しており、現況の土地利用のほとんどは宅地として利用されている。遺跡の発見は平成に入ってからで、平成４年（1992）の大型店舗建設に伴う試掘調査によって遺跡の存在が明らかとなり、これまでに今次調査を含め９度にわたる本調査が実施されている。ここでは、第１次～第８次調査で得られた資料をもとに、時代ごとに御岳田遺跡を概観する。

縄文時代

これまでの調査において、当該期の遺構は検出しておらず、遺構外遺物として縄文土器片がわずかに出土している程度である。

弥生時代

第７次調査において、初めて当該期の遺構と遺物を確認した。弥生時代後期の住居跡を２軒確認した。

古墳時代

調査によって得られた資料が豊富な時代で、4 世紀中頃～ 5 世紀初頭の住居跡 8 軒、5 世紀中頃の住居跡 1 軒を確認している。特徴的な遺物として、第 1 次調査において遺構外から水晶の原石 6 点と共に丸玉未製品 1 点が出土し、第 6 次調査では 1 号溝跡から緑色凝灰岩製の管玉未製品が出土している。また、御岳田遺跡から南東に約500m、東側の微高地に立地する末法遺跡では 2 点、上下から孔が穿たれているもののずれて貫通していない管玉と珪化凝灰岩のチップがまとまって出土している。

これらの遺物が荒川右岸の微高地上の遺跡から出土したことによって、玉造り工房跡が荒川右岸の微高地を拠点として存在した可能性が現実味を帯びる結果となり、古墳時代前期の玉造りの実態を解明する上で重要な成果が得られたといえよう。ほかに、第 6 次調査では本遺跡で初めて周溝墓を確認しており、細長く狭い調査区ではあったが、様々な新発見があった調査であった。

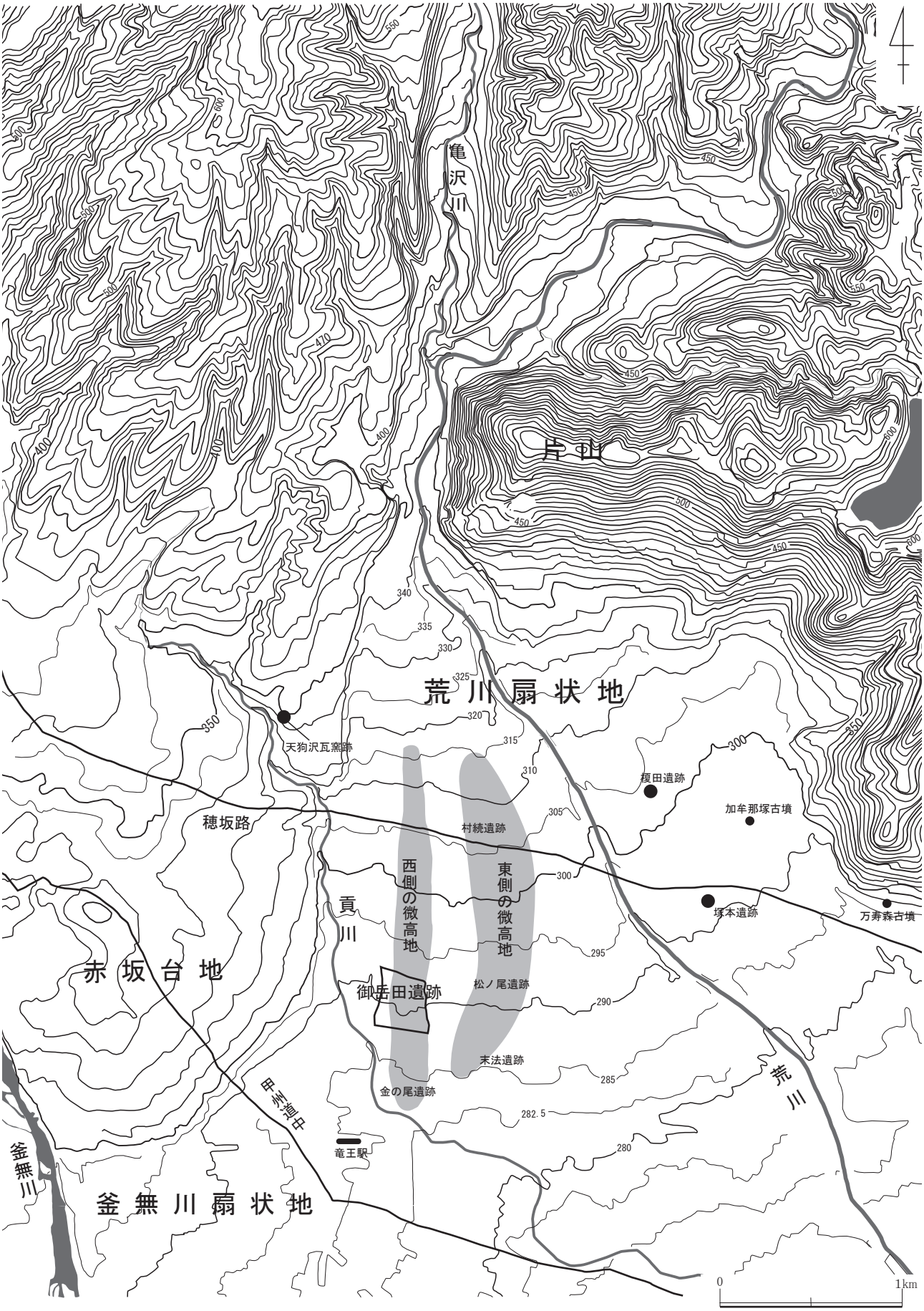
平安時代

古墳時代と共に資料が豊富な時代である。これまでの調査で住居跡の検出数は25軒である。中でも 9 世紀後半から10世紀前半にかけての住居跡が15軒と約半数を占める。第 5 次調査では、9 世紀後半に位置付けられる 3 号住居跡から「伴」の墨書がある坏や、「有」の墨書がある皿などが出土し、第 5 次調査区全体では墨書土器が合わせて17点出土している。

平安時代以降

第 6 次調査で、六文銭を伴う15世紀後半の土壙墓を確認した。その他、第 8 次調査では、15世紀後半の土師質土器の土器集中を 2 基検出している。

以上、御岳田遺跡は古墳時代と平安時代に関する調査成果が充実している遺跡である。なお、第 1 章、第 2 章については『御岳田遺跡 8 』の報告書から本文を部分引用している。

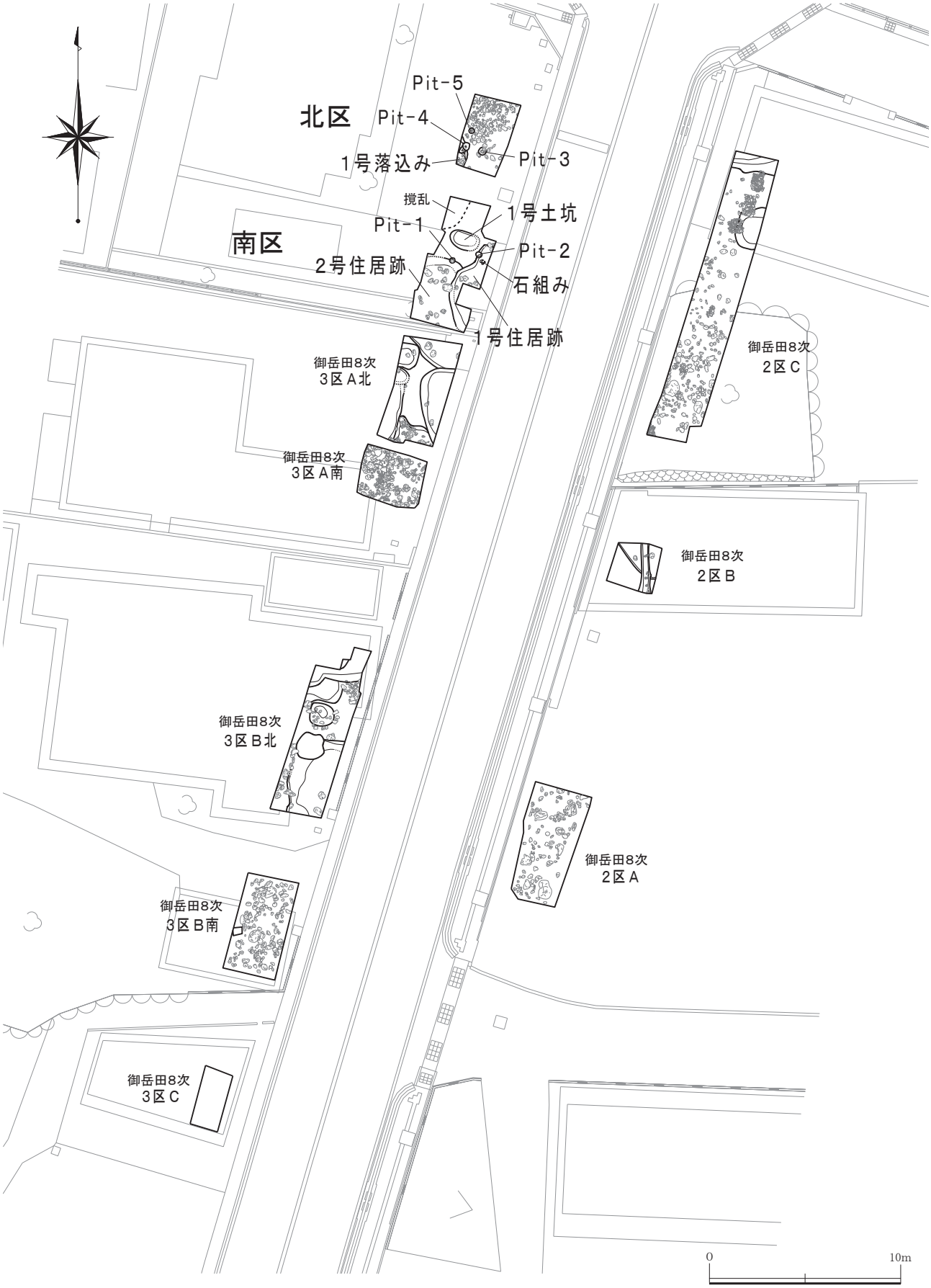

亀沢川
片山
荒川扇状地
天狗沢瓦窯跡
穂坂路
榎田遺跡
加牟那塚古墳
村統遺跡
西側の微高地
東側の微高地
貢川
塚本遺跡
万寿森古墳
赤坂台地
御岳田遺跡
松ノ尾遺跡
末法遺跡
金の尾遺跡
甲斐線
竜王駅
荒川
釜無川
釜無川扇状地
0
1km

第2図　周辺地形図

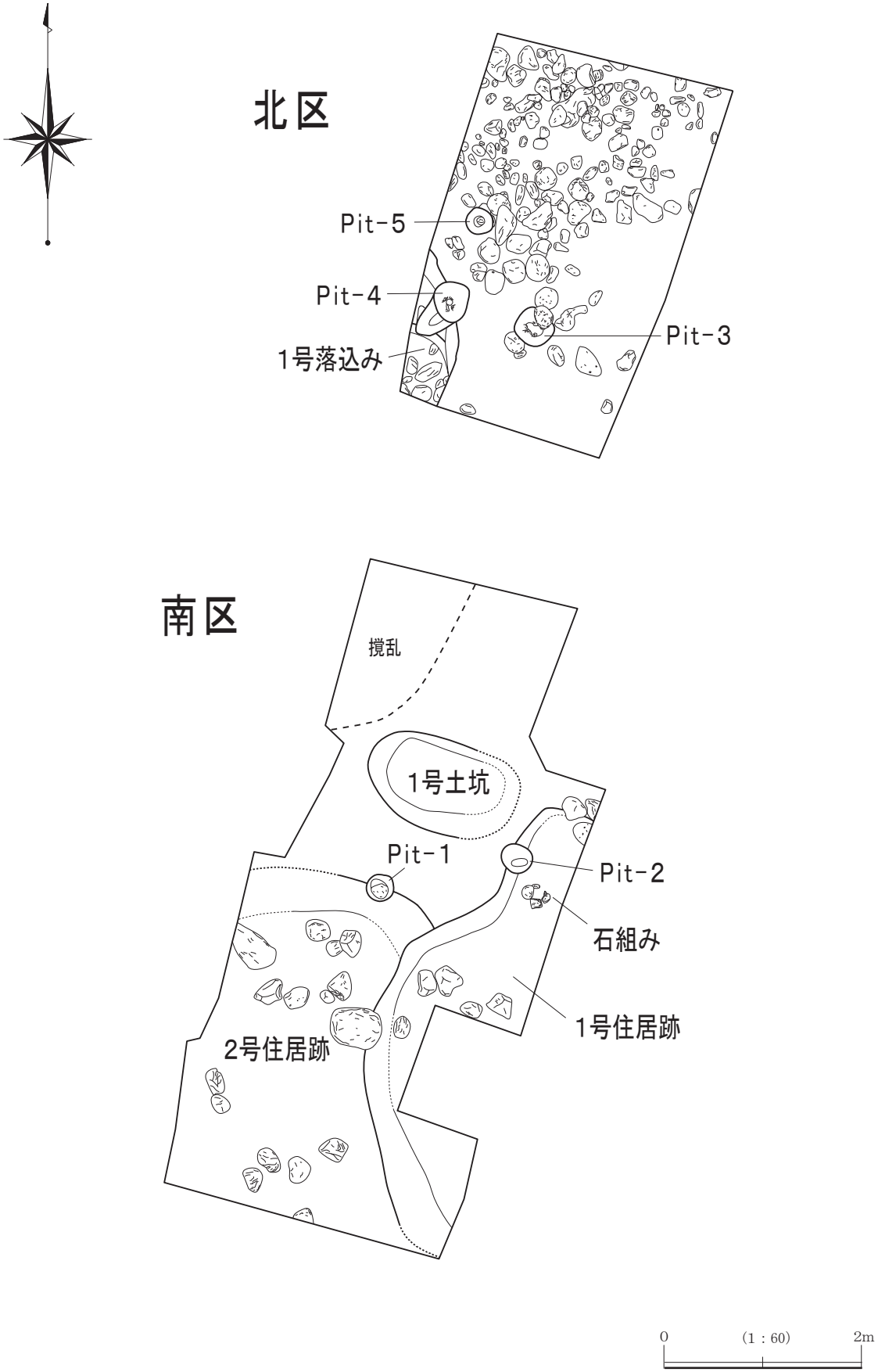
第3図　御岳田遺跡と周辺の遺跡

第5次調査区
第1次調査区
第7次調査区
第4次調査区
第6次調査区
第2次調査区
第9次調査区
第3次調査区
第8次調査区
御岳田
主要地方道甲斐中央線
原山神社
0
50m

第4図　調査区位置図①


北区
Pit-5
Pit-4
1号落込み
Pit-3
撹乱
1号土坑
Pit-1
南区
Pit-2
2号住居跡
石組み
1号住居跡
御岳田8次
3区A北
御岳田8次
3区A南
御岳田8次
2区C
御岳田8次
2区B
御岳田8次
3区B北
御岳田8次
2区A
御岳田8次
3区B南
御岳田8次
3区C
0
10m

第5図　調査区位置図②


北区
Pit-5
Pit-4
1号落込み
Pit-3
南区
撹乱
1号土坑
Pit-1
Pit-2
石組み
1号住居跡
2号住居跡
0
(1 : 60)
2m

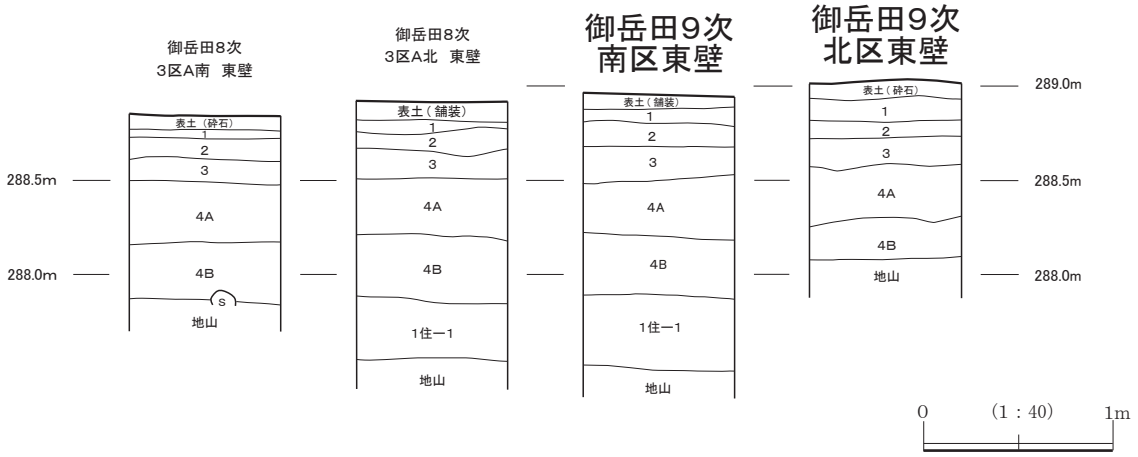
第6図　調査区全体図

第３章　遺構と遺物

平成28年度に行った８次調査と同様、調査対象地全体を一度に調査することが困難であったため、調査区を南北に分けて調査を実施し、便宜上南区・北区という名称を設定した。南区では調査区南壁と北西壁付近はカクランであったことから、調査区の壁の崩壊を防ぐ目的と、民地に影響が及ばないよう掘削を行った。南区がいびつな形状をしているのは、安全管理上掘削を行えない部分があったためである。

第１節　基本層序

８次調査区の近接地である今次調査区の土層は、基本的には近接地と同様の堆積状況である（第７図）。表土（砕石・舗装）以下、１層が旧水田耕作土、２層は旧水田耕作土と３層の旧床土が混じる層。３層以下４層が遺物包含層で、4A層と4B層に分類できる。地山は砂礫層で、粗粒砂・中粒砂と大小さまざまな円礫で構成される。円礫の検出量は北区が顕著であった。８次調査区と同様の地山であることから、今次調査区も旧河道であったと考えられる。



基本層序	土層名	色番号	説　　明
1層	暗灰黄色土	2.5Y4/2	旧水田耕作土　粘性あり　しまり非常に強い　5mm大の小礫を含む
2層	漸移層		1層と3層が混じる層
3層	褐色土	7.5YR4/4	旧床土　粘性あり　しまり非常に強い　1cm大の小礫を含む
4A層	黒褐色土	10YR2/3	遺物包含層　粘性あり　しまり強い　1cm ～ 2cm大の礫を少量含む
4B層	黒褐色土	10YR2/2	遺物包含層　粘性あり　しまりあり　5cm大の礫を少量含む
地山	にぶい黄褐色土	10YR4/3	砂礫層　砂粒は中粒砂　粘性なし　しまりなし 砂粒は乾くとにぶい黄褐色（10YR6/3）に変化する 北区地山には多量の円礫が含まれる

第7図　基本土層図・土層説明

第２節　遺構と遺物

前述のとおり調査区を南区と北区に分けて調査を実施した。今次調査で確認された遺構は、住居（竪穴建物）跡２軒、土坑１基、落込み１期、ピット５基、石組み１基である。調査区ごとの検出遺構は下記にまとめた。遺構検出面は２面あり、ピットと石組みは検出面が4A層、その他の遺構は地山が遺構検出面であった。また、出土遺物は小破片がほとんどであった。以下、遺構・遺物について述べるが、遺構時期については凡例にも記してあるとおり、『山梨県史　資料編２原子・古代２』「第２章　山梨県の考古学編年」をもとにしている。

南区検出遺構：１号住居跡、２号住居跡、１号土坑、ピット１～２、石組み
北区検出遺構：１号落込み、ピット３～５

１号住居（竪穴建物）跡（遺構・遺物：第８図）

形状・規模　南区で検出。遺構は調査区外へと伸長するため、全体の規模は不明である。検出規模は南北4.2m、東西1.26m、遺構の深さは最大25㎝である。形状はやや不整形な形状を呈している。２号住居跡と重複するが、切り合い関係から１号住居跡の方が新しい。

遺　　物　遺物の出土量は、他の遺構に比べると多いものの、小破片がほとんどを占め、図化遺物は４点。１は床面付近から出土した皿。内面には同心円状暗文、底部はロクロ整形後回転ヘラ削りを施している。口縁部は外反がほとんどなく、口縁部と体部の屈曲はやや不明瞭である。２は１と同地点から出土した皿で、１と比べるとやや胎土に白みを帯びている。内外面の底部には、指でなでたような十字の擦痕が薄くみえる。３は甲斐型土器の皿。口縁部はやや内湾し、玉縁化の兆候がみられる。１・２は赤色粒子の含有量が３に比べて低い。４は床面直上から出土した高台付皿。

遺構時期　平安時代中期（９世紀後半～10世紀前半）

調査所見　部分的な調査しかできなかったが、これまでの発掘調査で最も数多くの住居跡を検出した時期（９世紀後半～10世紀前半）と同時代の遺構である。精査を行ったが硬化面や柱穴等は確認できなかった。隣接する第８次調査区の３区A北とは床面である地山の状況が若干異なり、中粒砂を主とした土質で、大小の円礫はほとんど検出されなかった。

２号住居（竪穴建物）跡（遺構・遺物：第９図）

形状・規模　南区で検出。遺構は調査区外へと伸長するため、全体の規模は不明である。検出した規模は南北3.5m、東西2.4m。遺構の深さは最大54㎝である。位置関係から第８次調査区３区A北（第５図参照）で検出された２号住居跡の延長部分にあたる。１号住居跡に切られている。

遺　　物　図化遺物は２点。２点とも住居跡覆土下層から出土した。５は土師器坏の底部で、割れ口の摩耗が著しい。いわゆる甲斐型土器と比較して、赤色粒子の含有量はやや少なく、胎土もにぶい黄橙色をしている。６は土師器甕の口辺部で、口縁部は厚口口縁を呈している。

実測図上には表現できなかったが、口縁部内面には横位のハケ目がうっすらと視認できた。割れ口の摩耗はほとんど見られない。

遺構時期　出土遺物量が極端に少なく時期の断定には至らなかったが、1号住居跡との切り合い関係から、平安時代中期以前の遺構と思われる。

調査所見　前述のとおり、今次調査で検出された本遺構は第8次調査において検出された2号住居跡の延伸部分である。調査区は異なるが、2つの遺構の検出規模を合わせると、長軸は約6m後、短軸は約5m弱と思われる。全体の形状や規模が不明なため明言は避けたいが、形状と規模から推測すると、古墳時代の遺構とも考えられる。

1号土坑（遺構：第10図）

形状・規模　南区で検出。形状は隅丸長方形を呈する。検出した長軸は推定1.54m、短軸は0.92m。遺構の深さは最大28㎝。

遺物　出土遺物なし

遺構時期　時期不明

1号落込み（遺構：第10図）

形状・規模　北区で検出。遺構は調査区外へと伸長するため、全体の規模は不明である。検出規模は南北1.49m、東西0.5m。遺構の深さは最大で49㎝。遺構内部は段状を呈する部分がある。また、Pit－4に切られる。

遺物　図化遺物なし

遺構時期　時期不明

調査所見　遺構北側から南側にかけて段状部分を有する。遺構の断面観察をしたが、切り合い関係は認められず、第10図に示したとおりの形状となった。出土遺物は土師器の極小細片のみで、時期の特定には至らなかった。

ピット（Pit）・石組み（遺構：第11図）

これらの遺構は包含層である4A層から検出された。1号住居跡や2号住居跡が検出された面よりも上層であるため、少なくとも平安時代中期以降の遺構である。

Pit－1　南区で検出。長軸・短軸とも20㎝、深さは最大で30㎝程度。底に扁平な礫あり。

Pit－2　南区で検出。長軸20㎝、短軸18㎝、深さは最大で40㎝程度。

Pit－3　北区で検出。長軸・短軸とも35㎝、深さは最大で45㎝程度。地山の礫を除去して掘削されていた。

Pit－4　北区で検出。長軸70㎝、短軸30㎝、深さは最大で50㎝程度。Pit－3と同様、地山の礫を除去して掘削されており、底には柱を根固めするように円礫が配置されているように見えた。

Pit－5　北区で検出。長軸・短軸ともに25㎝、深さは最大で35㎝程度。底面で円礫を検出。

石組み　南区で検出。Pit－2に近接する。石組の中心部は4A層が堆積しており、除去すると20㎝程度の空隙が生じた。

遺構外出土遺物（第12図、第13図）

11点を図化した。遺構外遺物はほとんどが包含層である4B層からの出土である。また、図化ができなかったその他の出土遺物も土師器小片が主であった。

7 は4A層から出土した弥生土器で、破片上部にわずかに赤彩が確認できる。外面には無節縄文を施したのち、ボタン状貼付文を施す。内面には横位ハケ目を施している。8 は4B層から出土した砥石、6 面全体に使用痕が認められる。9 は4B層下層から出土した土師器で、甲斐型土器の皿。底部糸切り後にヘラ削りで調整を施す。焼成時によるものなのか、見込み部分にややザラザラとした凹凸部分がある。割れ口は部分的に摩耗している。10は4B下層から出土した緑釉陶器埦の口辺部。隣接する第 8 次調査区の 3 区Ａ北でも、包含層の4A層から緑釉陶器片が 2 点出土している。11 ～ 17は4B下層と地山との間（地山直上）から出土した遺物である。11・12は土師器坏で、甲斐型土器である。底部は欠損しているが、外面下半に回転ヘラ削りを施し、内面には放射状暗文を施す。12は内面に黒色加工ないし煤付着痕とおもわれる部分が、ごくわずかに確認できる。13・14は土師器坏の墨書土器である。過去の御岳田遺跡の発掘調査では、同様の字形の墨書土器が数点出土している。15は土師器の小型甕。外面にはハケ目が見られ、内面は横位のナデがわずかに看取できる。16は甕ないし壺の底部。外面底部はヘラ削り調整を施している。17は凹み石。

全体の傾向として、図化図面以外にも遺構外出土遺物は 9 世紀後半～ 10世紀前半代の土師器の出土が目立つ。これは、第 8 次調査までに御岳田遺跡で検出された住居跡のうち、上記時期の住居跡が15軒と最も検出数が多く当該時期が遺跡の最盛期であったと考えられることから、遺構外で同時期の遺物量が目立つことも頷ける。

第４章　まとめ

本遺跡はこれまで述べたとおり、古墳時代・平安時代の調査成果が充実している遺跡である。今次調査でも、狭小な調査範囲ではあったが、それらの時代の新たな調査成果が蓄積され、荒川扇状地上に立地する当時の集落や土地利用について、新たな知見を得ることができた。それらを以下に述べる。

第９次調査の調査区は、平成28年度に行われた第８次調査区の隣接地にあたるため、基本土層はほぼ同様の堆積状況であった。そのため、第８次調査区と同様に主な遺構は地山の砂礫層を掘削してつくられていた。また、検出した地山も掘削する場所によっては礫を主とした部分、中粒砂を主とした部分があるなど、地山の検出様相も第８次調査区と類似していた。このことから、今次調査区も旧河道に位置していると考えられる。第８次調査区同様、旧河道であった場所に人々が居住していた実態を付言することができた。

検出した遺構について、時期が確定できたものは１号住居跡１軒のみと、調査区内の遺構時期の性格をつぶさに掴むことは非常に難しかった。２号住居跡については、１号住居跡との切り合い関係からおおよその遺構時期が推定できたが、出土遺物がほとんどなく、明確な時期の特定までには至らなかった。

約30㎡という狭い調査区であったが、遺構外から墨書土器が２点出土した（第12図－13・14）。上記２点の墨書「 」「 」と同様または類似形の墨書は、過去の御岳田遺跡の調査でも出土しており、第１次調査区の３号住居跡、第２次調査区の４号住居跡・遺構外、第４次調査区の６号住居跡、第５次調査区の遺構外等で出土している。近接する調査区で同様の墨書が出土していることから関連性がうかがえるが、現時点ではそれ以上の言及はできない。

今次調査は第８次調査区で最も検出住居跡数の多かった３区A北に隣接する位置にあるため、同時期の遺構や遺物が確認される可能性は高かった。実際、３区 A北で検出された２号住居跡の延伸部分を今次調査の南区で検出し、遺構の広がりを確認することができた。地山は３区A北で確認したような円礫の多い砂礫層ではなかったため、今次調査区の遺構は「砂質で多少の円礫の混じる地山を掘り下げて住居を営む」というイメージである。ただし、今次調査の北区においては多量の円礫を含む砂礫層であるため、第８次調査区同様に隣接地であっても地山の様相は異なることを再認識した。

以上みてきたように、今次調査では第８次調査で判明した事実と同様、旧河道であった場所に人々が生活したことがわかった。狭い範囲の調査ではあったが、これまでの調査成果を補完する成果を得られたよう思う。

御岳田遺跡第９次調査及び整理・分析調査については、委託者である山梨県中北建設事務所をはじめ、近隣住民の方々にも多大なご協力をいただいた。深甚なる謝意を表すとともに、これらの調査成果を地域住民や教育普及事業に還元していきたい。

御岳田遺跡第１次から第９次までの調査成果

［住居跡］	２世紀後半 ～ ３世紀初頭	２軒	［周溝墓］４世紀初頭	１基
	４世紀中頃 ～ ５世紀初頭	８軒		
	５世紀中頃	１軒		
	９世紀後半 ～ 10世紀前半	15軒（1住）		
	10世紀中頃 ～ 後期	１軒		
	11世紀初頭	２軒		
	11世紀後半	６軒		
	12世紀初頭	２軒		
	時期不詳	６軒（２住…平安時代中期以前）		

【参考文献】

山梨県　『山梨県史　資料編２原始・古代２』　1997

敷島町教育委員会　『御岳田遺跡』敷島町文化財調査報告書　第８集　1999

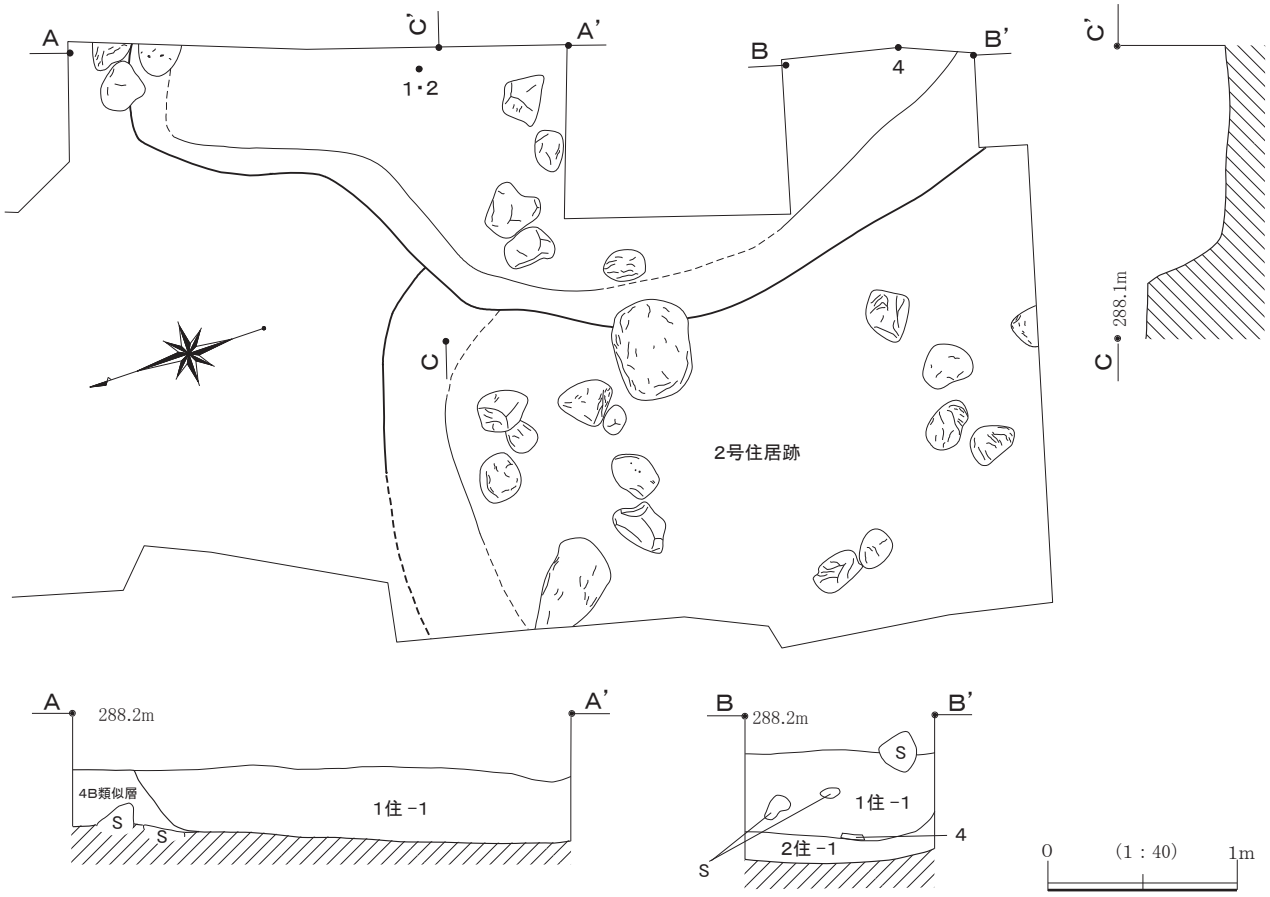
敷島町教育委員会　『御岳田遺跡Ⅱ』敷島町文化財調査報告書　第22集　2004

甲斐市教育委員会　『御岳田遺跡Ⅳ』甲斐市文化財調査報告書　第11集　2007

甲斐市教育委員会　『御岳田遺跡Ⅴ』甲斐市文化財調査報告書　第21集　2013

甲斐市教育委員会　『御岳田遺跡Ⅵ』甲斐市文化財調査報告書　第22集　2014

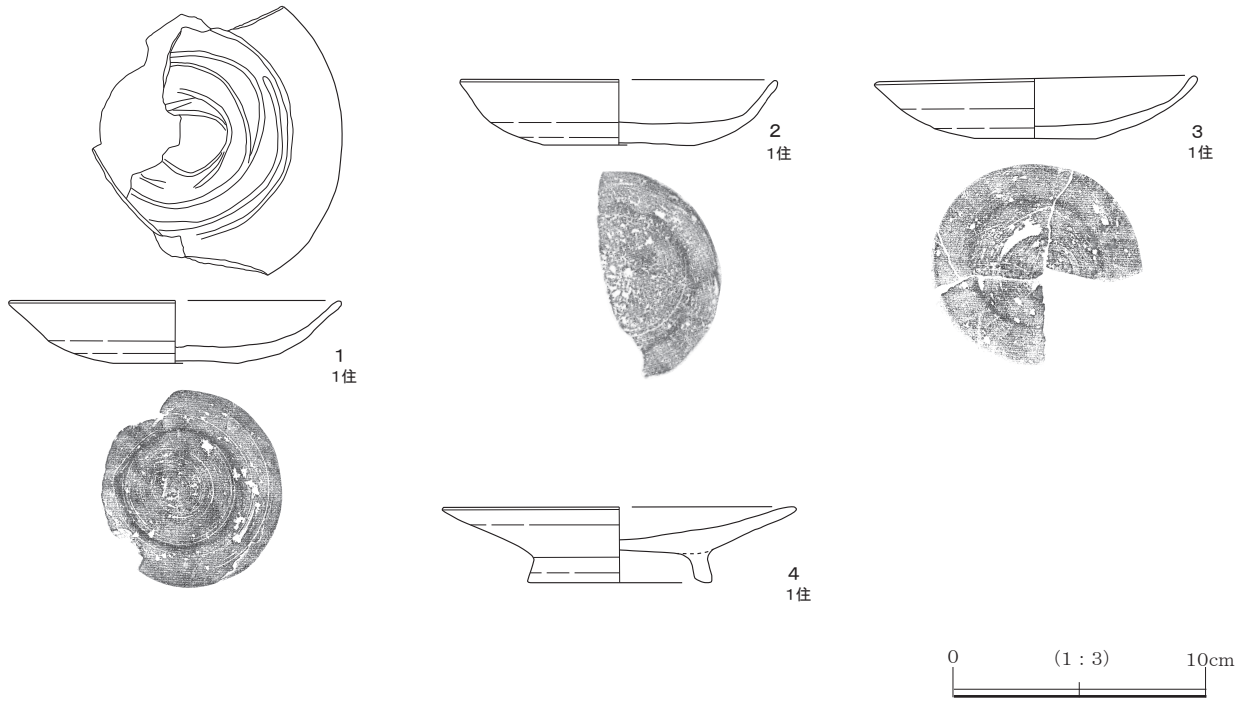
甲斐市教育委員会　『御岳田遺跡８』甲斐市文化財調査報告書　第28集　2018



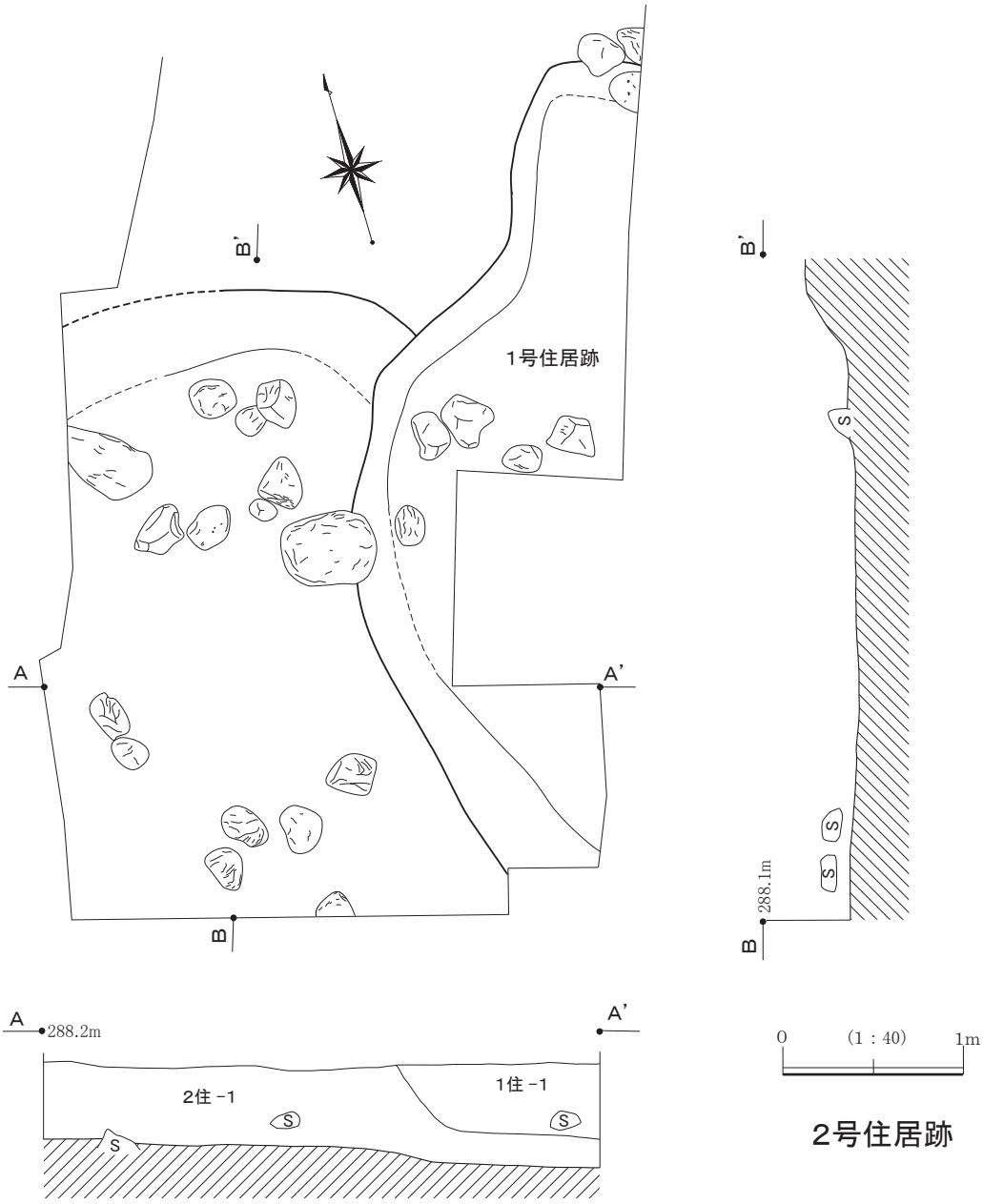
4B類似層
黒色土(10YR2/1) 粘性強い しまり非常に強い

1住 -1、黒褐色土(10YR2/2) 粘性強い しまり強い
2住 -1、黒色土(10YR1.7/1) 粘性強い しまり強い

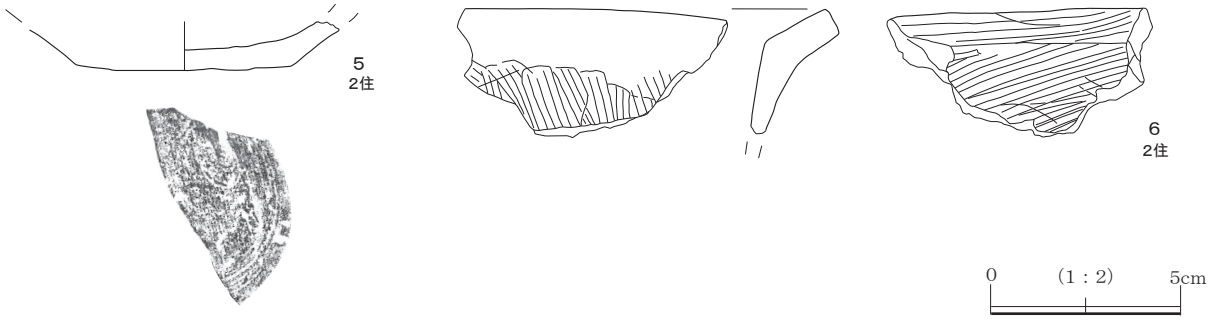
1号住居跡



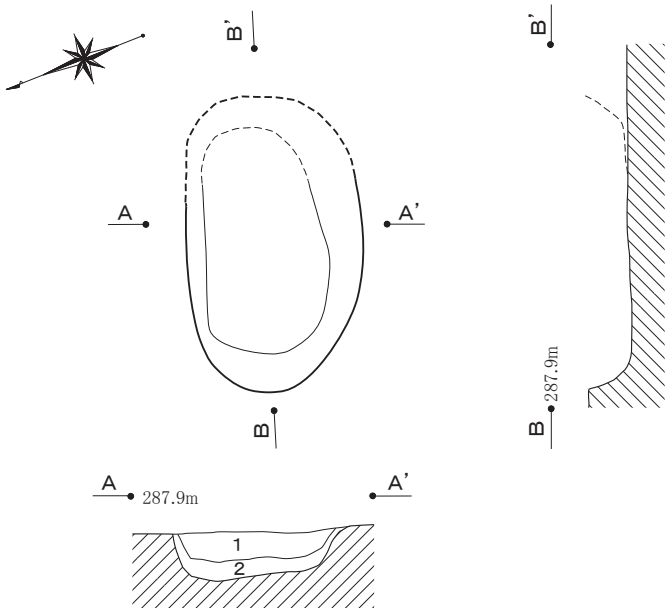
第8図 1号住居跡 遺構と遺物



2住 -1、 黒色土(10YR1.7/1) 粘性強い しまり強い　　1住 -1、 黒褐色土(10YR2/2) 粘性強い しまり強い

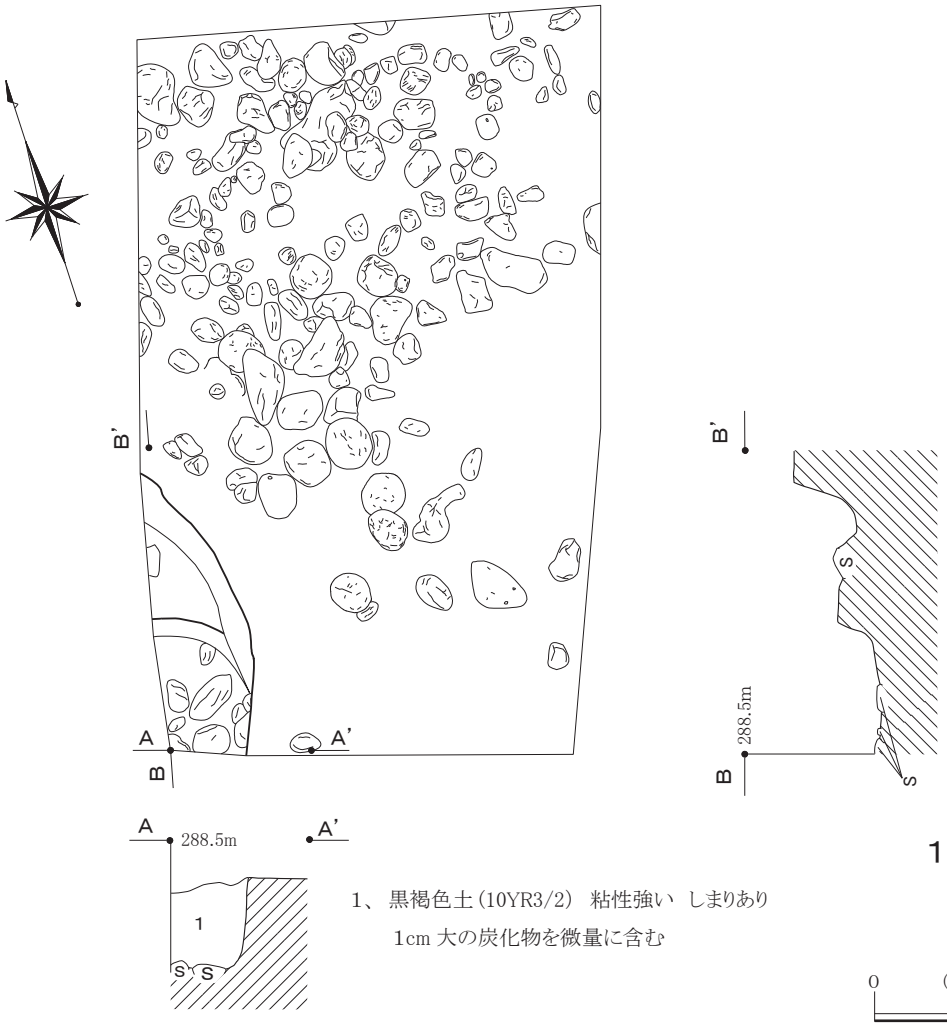


第9図 2号住居跡 遺構と遺物



1、暗褐色土(10YR3/3) 粘性あり しまりあり 炭化物を少量含む
2、黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり しまりあり 褐色(10YR4/4) の砂を含む

1号土坑

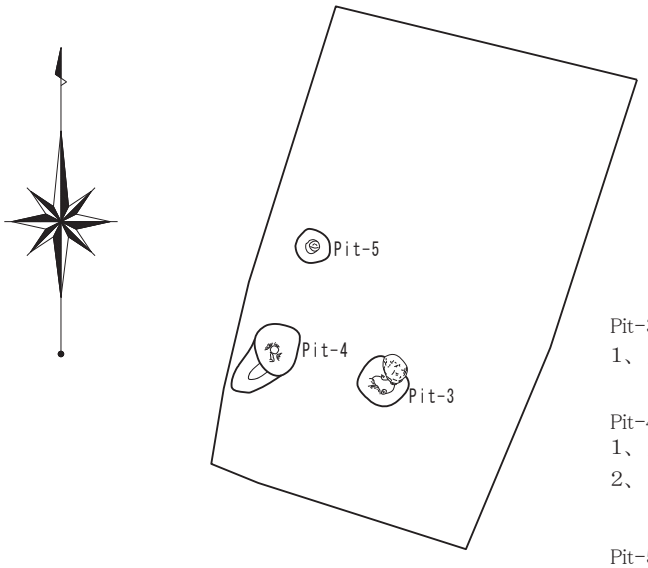


1号落込み

1、黒褐色土(10YR3/2) 粘性強い しまりあり
1cm 大の炭化物を微量に含む

0 (1：40) 1m

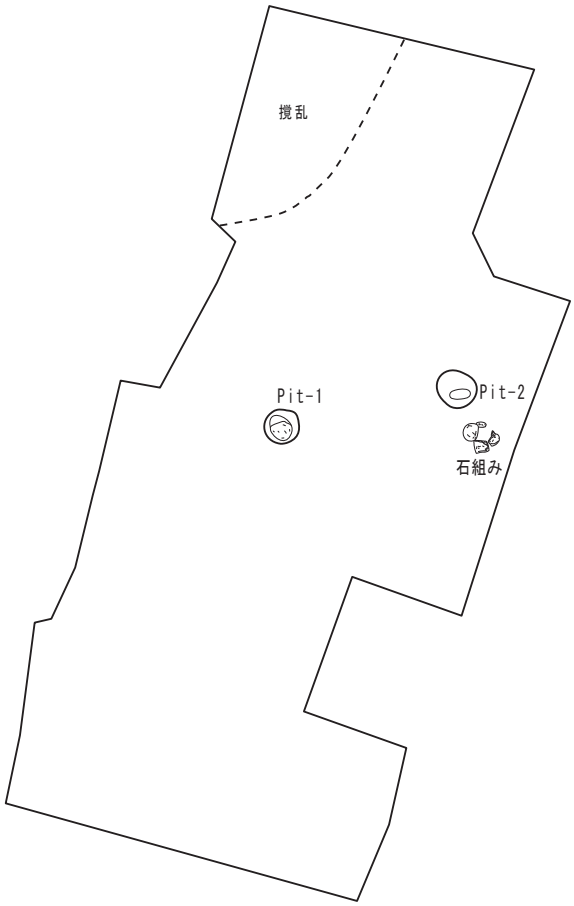
第 10 図 1号土坑・1号落込み



Pit-3
1、灰黄褐色土（10YR4/2） 粘性強い しまり強い

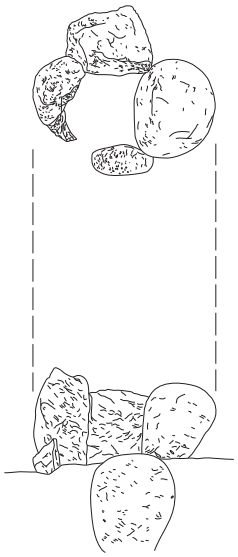
Pit-4
1、灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性強い しまり強い
2、黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり しまり強い

Pit-5
1、灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性強い しまり強い



Pit-1
1、黒褐色土(10YR3/2) 粘性あり しまり強い
ごく少量の炭を含む

Pit-2
1、黒褐色土(10YR3/2) 粘性あり しまり強い
ごく少量の炭を含む

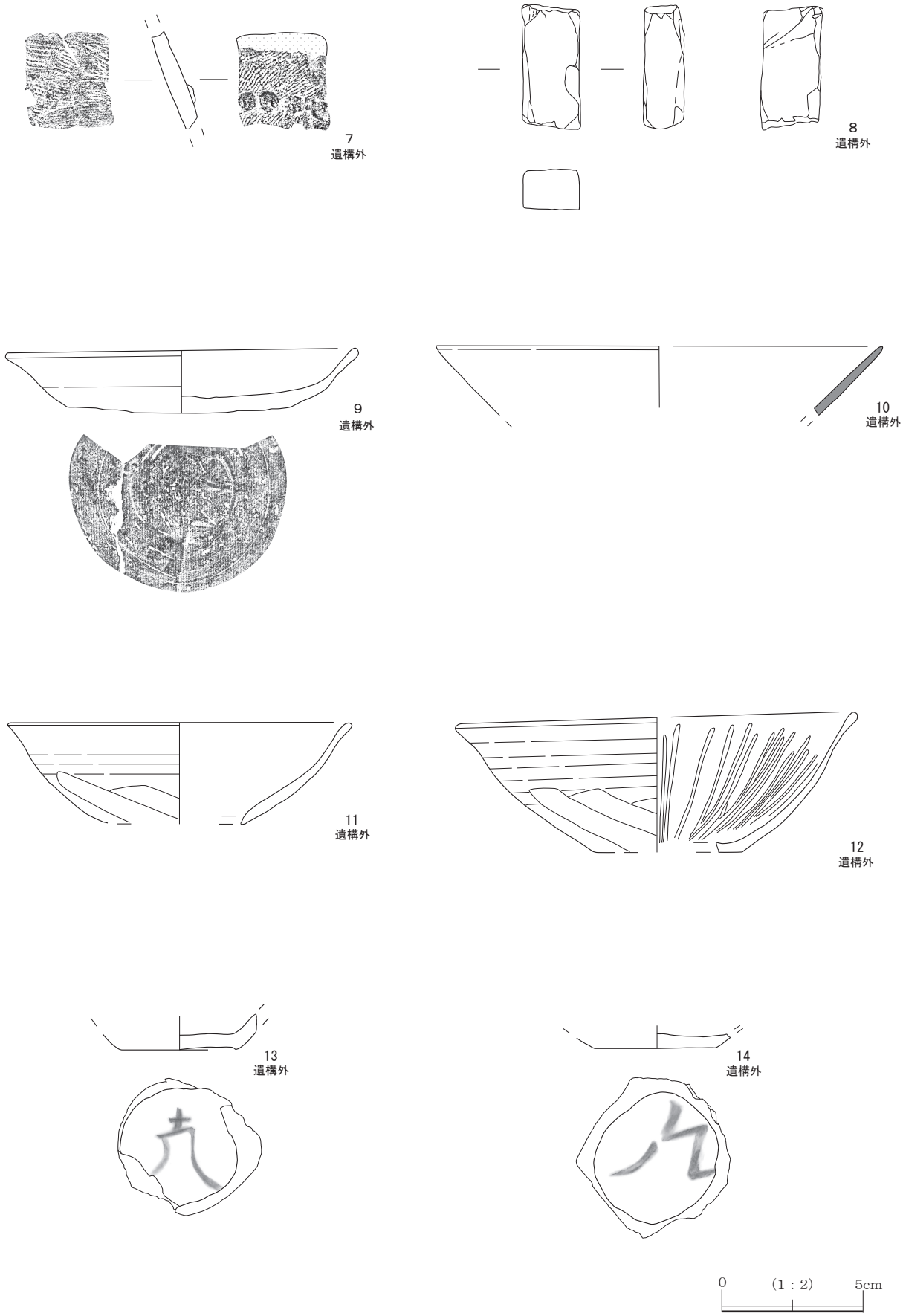


0 (1：60) 2m

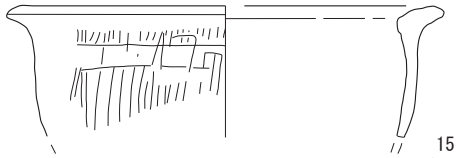
ピット・石組み

0 (1：10) 20cm

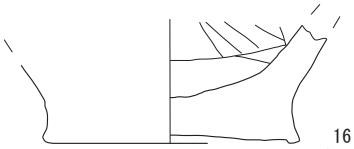
第 11 図 ピット・石組み



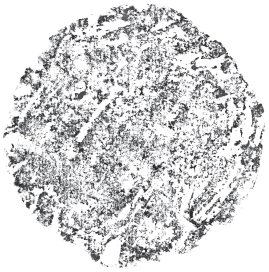
第 12 図　遺構外　出土遺物①



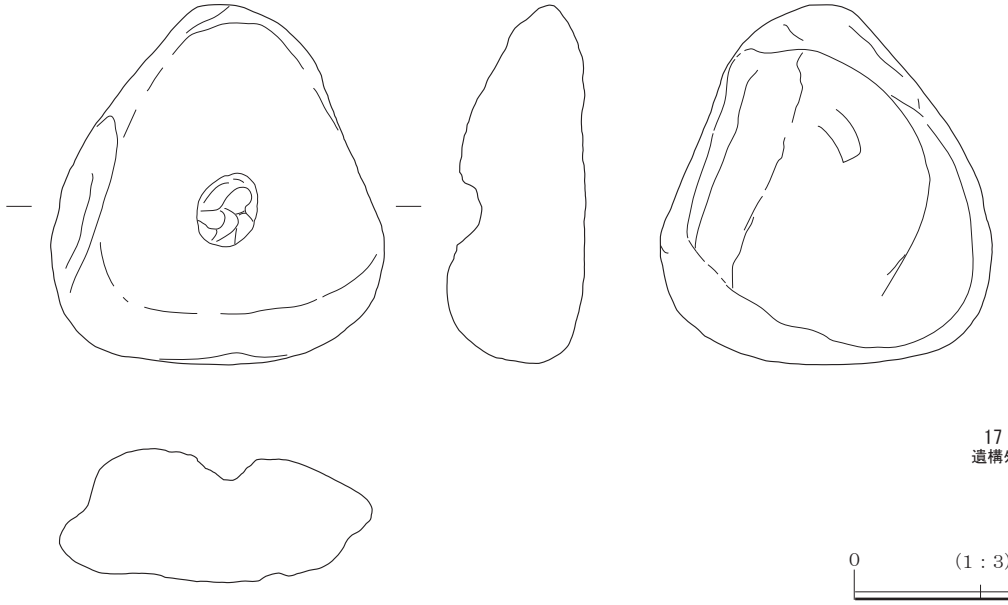
15
遺構外



16
遺構外



0 (1：2) 5cm



17
遺構外

0 (1：3) 10cm

第 13 図 遺構外 出土遺物②

第１表　出土遺物観察表

番号	注記番号	器 種	器 形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	技法・器形の特徴
1	E9-1住 P1-1	土師器 (甲斐型)	皿	2.5	(13.0)	5.0	橙 (5YR6/6)	キメ細かく緻密 金雲母・赤色粒子	良好	内面渦巻状暗文 底部糸切後ヘラ調整
2	E9-1住 P1-2	土師器	皿	2.6	(12.4)	(6.0)	内面橙 (5YR7/6) 外面明黄褐 (10YR7/6)	キメやや粗く緻密 白色粒子	良好	内外面ハケ調整 底部糸切後ハケ調整
3	E9-1住一括	土師器 (甲斐型)	皿	2.5	12.6	5.0	橙 (5YR6/6)	キメ細かく緻密 赤色粒子多量 金雲母微量	良好	底部糸切後ヘラ調整
4	E9-1住 P2	土師質土器	高台付皿	3.05	(14.0)	7.4	橙 (5YR7/6)	キメ細かく緻密 白色粒子・赤色粒子	良好	
5	E9-2住下層一括	土師器	坏	残1.3	—	(5.8)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	キメやや粗く緻密 赤色粒子・金雲母	良好	底部糸切後ヘラ調整
6	E9-2住下層一括	土師器	甕	残3.3	—	—	にぶい褐 (7.5YR5/4)	金雲母・長石を含む	良好	内面口縁部横位ハケ目 ナデ調整体部斜位ハケ目 外面口唇～口辺部横位ナデ体部縦位ハケ目
7	E9-4A層一括	弥生土器	甕 or 壺	残3.6	—	—	にぶい褐 (7.5YR5/4)	長石を少量含む	良好	内面横位ハケ目 外面上部赤彩縄文施文後４つ平行に1cm大のボタン状貼付文
8	E9-4B層一括	石製品	砥石	最大長 4.2	最大幅 2.0	最大厚 1.4				6面全体に使用痕あり
9	E9-4B下層一括	土師器 (甲斐型)	皿	2.35	12.4	7.8	橙 (5YR6/6)	キメやや粗く緻密 長石・赤色粒子	良好	
10	E9-4B下層 E9-4B一括	緑釉陶器	埦	残2.5	(16.0)	—	灰オリーブ (7.5Y5/2)	キメ細かく緻密	良好	内外面緑釉を施す
11	E9-4B下砂層一括 E9-4B下層一括	土師器 (甲斐型)	坏	残3.5	12.2	—	橙 (5YR6/6)	キメ細かく緻密 赤色粒子	良好	外面体部下半回転ヘラ削り 内面くすみあり
12	E9-4B下砂層一括	土師器 (甲斐型)	坏	5.0	14.1	(5.3)	明赤褐 (5YR5/6)	キメ細かく緻密 赤色粒子・金雲母	良好	内面放射状暗文外面体部下半ヘラ削り
13	E9-4B下砂層一括	土師器 (甲斐型)	坏	残1.3	—	4.2	にぶい赤褐 (5YR5/4)	キメ細かく緻密 長石・赤色粒子	良好	外面底部墨書あり外面底部糸切後ヘラ整形
14	E9-4B下砂層一括	土師器 (甲斐型)	坏	残0.4	—	4.3	内面にぶい黄褐 (10YR5/3) 外面にぶい褐 (7.5YR5/4)	キメ細かく緻密 長石・赤色粒子	良好	外面底部墨書あり外面底部糸切後ヘラ整形
15	E9-4B下砂層一括	土師器	小型甕	残3.5	(11.0)	—	にぶい赤褐 (5YR4/3)	長石を含む 雲母をまばらに含む	良好	内面体部横ナデ 外面体部縦方向ハケ目後口辺部横方向ナデ
16	E9-5層地山直上一括	土師器	甕 or 壺	残3.1	—	6.8	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石・雲母を含む	良好	内面横位ハケ目外面底部ヘラ整形
17	E9-5層地山直上一括	石製品	凹石	最大長 14.3	最大幅 13.2	最大厚 5.0				安山岩

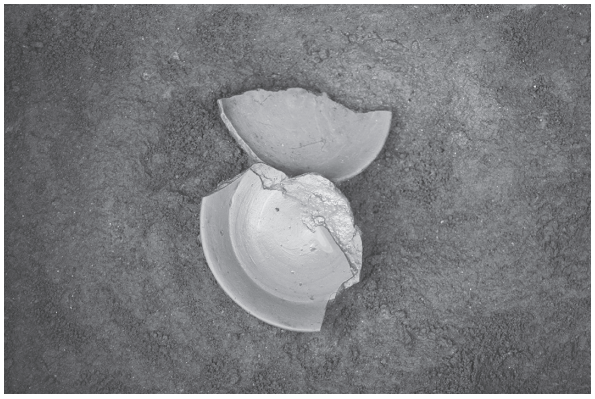
写 真 図 版

図版１

南区　２号住居跡・１号住居跡　完掘（南から）

南区　１号住居跡　完掘（南西から）

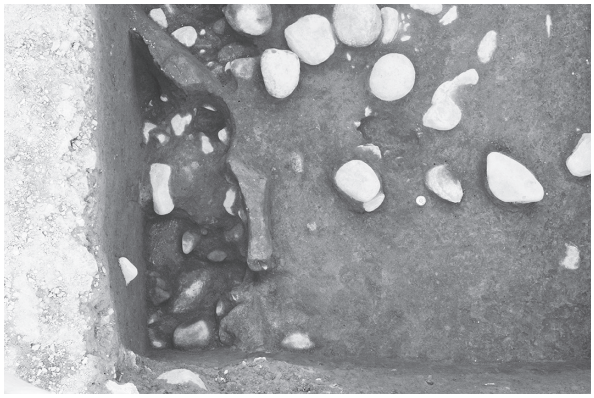
南区　１号住居跡　土器（１・２）出土状況
（北西から）



南区　１号住居跡　土器（１・２）出土状況

南区　１号住居跡　土器（４）出土状況

南区　１号土坑　完掘（北西から）



北区　１号落込み　完掘

南区　Pit-１　完掘

南区　Pit-２　完掘

北区　Pit-３　完掘

北区　Pit-４　完掘

北区　Pit-５　完掘

南区　石組み　完掘

図版 3

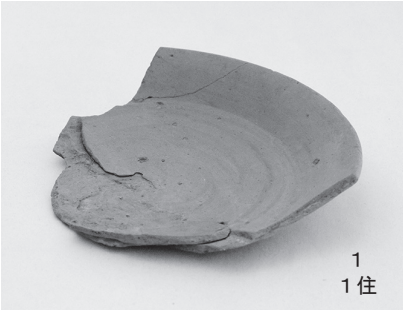
北区　完掘（北から）

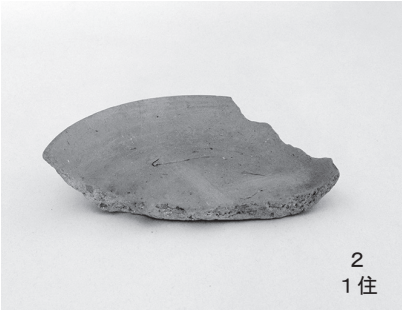
南区東壁　土層堆積状況

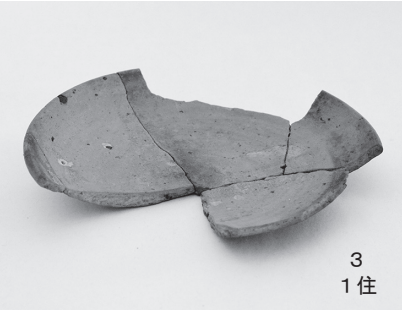
北区東壁　土層堆積状況

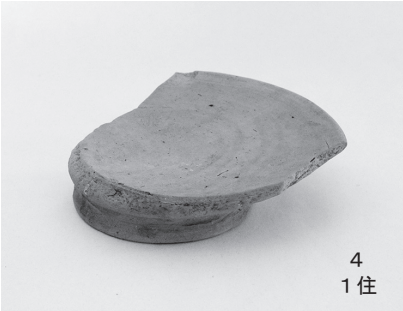
南区　調査風景

北区　調査風景


1
1住

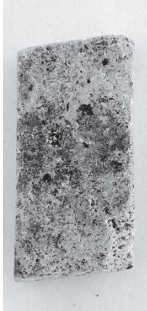

2
1住

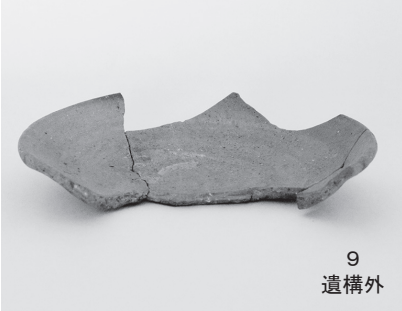

3
1住

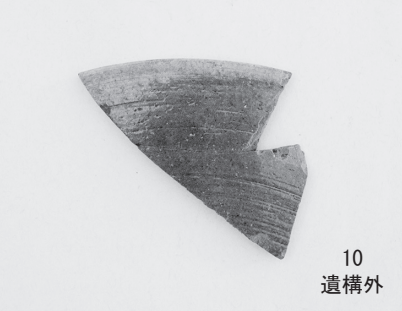

4
1住

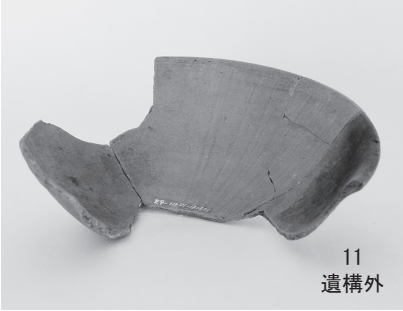
6
2住

7
遺構外


8
遺構外

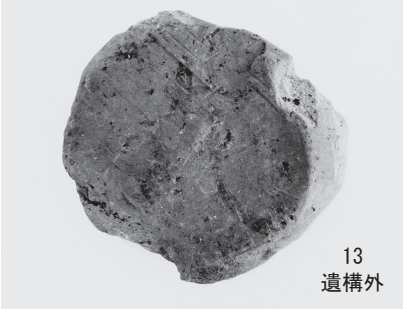

9
遺構外

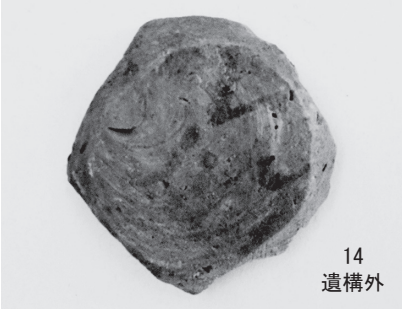

10
遺構外


11
遺構外

12
遺構外

16
遺構外


13
遺構外


14
遺構外

17
遺構外

報　告　書　抄　録

ふ り が な	み た け だ い せ き
書　　名	御　岳　田　遺　跡　9
副　書　名	都市計画道路田富町敷島線道路改良工事に伴う平安時代等の発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	甲斐市文化財調査報告書
シリーズ番号	29
編 著 者 名	長谷川 哲也
編 集 機 関	甲斐市教育委員会
所　在　地	〒400－0192　山梨県甲斐市篠原2610
発行年月日	平成31年［西暦2019年］2月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	発掘調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
御岳田遺跡（みたけだいせき）	山梨県 甲斐市 大下条地内	19210	敷－6	35度40分 30秒	138度31分 24秒	平成30年 7月20日 ～ 平成30年 9月7日	約30㎡	県道拡幅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御岳田遺跡	集落跡 旧河道	平安	住居跡	土師器 土師質土器	旧河道である地山を掘削して平安住居を検出。遺構外で墨書土器２点出土。

甲斐市文化財調査報告　第29集

御　岳　田　遺　跡　9

発行日　平成31年（2019）2月28日
発　行　甲斐市教育委員会
山梨県甲斐市篠原2610
TEL（055）278－1697
印　刷　山梨県甲府市丸の内1-10-1
株式会社 峡南堂印刷所